

# 津山市史だより

2018.12  
第13号



勝谷米荘山水図（額装）



賛および落款部分

この絵は、津山出身の画家勝谷米荘かつやべいそうが描いた山水図です。横長の絹本に描かれた水墨画で、額に仕立てられています。安井勝也氏から郷土博物館へ最近寄贈されました。

勝谷米荘は、津山城下戸川町の塚田家で明治初年頃に生まれています。生家の塚田家は森家の旧臣で、元禄の改易後は浪人して代々戸川町に居住していました。9歳の時、米子の勝谷家に養子に入り、若くして上京し、画業にいそしみました。いずれも南画家で文展審査員である山岡米華・小室翠雲の門下と伝わります。

花鳥図や山水図など、自然をモチーフとした作品が得意だったようで、大正年間に湯原の弥次郎岳を旭川の溪谷から描いた作品を文展に出品して評判になりましたが、大正14年（1925）50代半ばで他界しました。

この作品は、右上の落款に「己未冬日」とあり、大正8年（1919）の作とわかります。遠景を淡い墨で描き、余白も巧みに活かして、立体感のある作品に仕上がっています。画家としては比較的早く亡くなったため、現存作が少なく、郷里に残った貴重な作品です。

（小島）

# 30年度第1回編さん委員会

8月28日 於郷土博物館

## 部会通信

### 民俗部会

(部会長・前原委員、副部会長・安倉氏)

9月に部会を開催し、今後の調査計画や、執筆分担などを協議しました。聴取り調査や祭礼調査も継続中です。

### 自然風土・考古部会

(部会長・河本委員、副部会長・可児委員)

資料編「考古」は、版下作成の委託業者への入稿を行い、編集作業を進めています。

### 古代部会

(部会長・狩野委員、副部会長・今津委員)

### 中世部会

(部会長・久野委員、副部会長・前原委員)

資料編「古代・中世」の刊行に向けて、各執筆で作業中です。12月に合同部会を開催し、詳細を協議する予定です。

### 近世部会

(部会長・定兼委員、副部会長・在間委員)

資料編掲載候補の資料筆耕を事務局で進めており、各執筆者の個別調査も行われています。

### 近現代部会

(部会長・在間委員、副部会長・香山委員)

11月に部会を開催し、資料筆耕要領案や資料編・通史編の章立て案を協議しました。執筆者各自の調査も活発に行われています。

8月から新たに委員に加わった尾島氏に教育長から委嘱状が交付された後、4月の人事異動後の事務局体制の説明を兼ねて、職員が自己紹介しました。その後、「つやまの民話」の刊行・販売、30年度の事業予定や刊行スケジュールなどについて、事務局から報告されました。異動や退職で編さん室を離れた職員の取り扱いや、委員会規則の整備に関して、委員から要望が出され、事務局から関係各部署へそれぞれ協議を掛けることになりました。

### 編さん事業の経過 (平成30年8月)

- 8月 「市史だより」第12号発行
- 9月3日 三好基之氏からの聴取り②
- 9月25日 第2回民俗部会
- 10月9日 三好基之氏からの聴取り③
- 10月13日 美作学講座第3回
- 10月28日 第2回古代部会
- 10月29日 三好基之氏からの聴取り④
- 11月18日 第1回近現代部会



聴取り調査の様子

**三好基之氏からの聴取り調査**  
市史編さん委員会の元委員長で、津山市や美作地域の歴史・文化に造詣の深い三好基之氏から、ご自分の生い立ちや携わられたお仕事などについてお話を伺うため、編さん委員有志と事務局とで聴取り調査を行いました。今後、「市史研究」などへの記録掲載を検討しています。

津山市教委（生涯学習課）・美作大学共催

## 美作学講座

— 津山市史関連研究から —

第2回 8月18日

### 「鉄道黎明期の津山における諸事情」

講師・小西伸彦氏（近現代編執筆）



第2回の会場の様子

2回目の講師には、近現代編執筆担当者の小西伸彦氏をお迎えしました。小西氏は、産業考古学会・鉄道史学会会員として、鉄道の歴史を丹念に研究されています。今回は、津山市史編さんのために、島根・鳥取・大阪の各図書館・公文書館で調査された新聞資料などに基づいてご講演いただきました。

最初に導入として、愛染寺のおりんの碑の写真を示され、棟田博の小説『美作ノ国吉井川』において、まさしく鉄道黎明期の津山の世相が描かれ、美作出身の鉄道関係者の存在にも触れられていることを紹介されました。その後、日本における鉄道敷設の歴史を概観されたうえで、本題に入られました。

まず、明治12年（1879）、日本人として初めて機関士となった6人の中に、津山出身の日下輝道がいたことを紹介されました。そして、山陰・山陽を結ぶ鉄道建設を求めて、地元の名士や有志の人々が請願運動を行ったり、自ら会社を立ち上げて鉄道建設を企画したりしたことなど、今の津山線ができるまでの津山とその周辺地域の動向について、詳しく解説いただきました。

津山線には、津山出身の実業家・磯野計がイギリスから輸入したレールや橋梁が、未だに残っていますが、津山を中心とする美作地域が、いかに鉄道熱の旺盛な土地であったか、その背景には、津山ゆかりの洋学者たちの影響が少なくないことも示され、津山における鉄道の歴史や鉄道関係者の顕彰の重要性を強調されて、ご講演を締めくくられました。

会場には、鉄道ファンを含めて約70名の方が聴講に詰めかけ、皆さん方は熱心にご講演に聴き入り、終了後も多くの方が講師に質問しておられました。

津山市教委（生涯学習課）・美作大学共催

## 美作学講座

―津山市史関連研究から―

第3回 10月13日

### 「美作の前期古墳」

講師・澤田秀実氏

（くらしき作陽大学准教授／考古編執筆者）



第3回の会場の様子

3回目の講師には、くらしき作陽大学の澤田秀実氏をお迎えしました。澤田氏は、東京都埋蔵文化財センターにご就職の後、東京都立大学へ移られ、三角縁神獣鏡の編年や前方後円墳の築造企画をご研究でしたが、平成6年に恩師の近藤義郎氏の誘いで日上天王山古墳の発掘に携わられたのが、津山との縁の始まりだということです。

まず、美作地域には、およそ50基の前方後円墳・前方後方墳が分布し、水系や盆地単位で10個程度のエリアに区分され、南北方向は川で、東西方向は道で結ばれるような政治的枠組みの存在を想定できると概観を示されました。

続いて、植月寺山古墳や日上天王山古墳をはじめとする美作の個別の前期古墳の特徴や築造時期を、実測図面や発掘時の写真に基づいて詳しく解説されました。なお、美野盆地は前方後方墳が集中する特徴的なエリアだということです。

そのうえで、弥生時代の墓と前方後円墳・前方後方墳とを比較検討され、もともと顕著な首長墓を造る習慣がなかった美作に、畿内の政権から設計図による古墳造りの技術がもたらされて、弥生時代から古墳時代へと急激に転換した様子がうかがえ、吉備南部とは異なる展開が見られることや、設計図を共有する古墳を通じて地域首長が周辺を掌握していく構造が読み取れることなどを踏まえて、古墳時代の美作は、畿内政権と密接な関係を有しつつ、川を利用した交流によって、備前とも一定の関係を持ちながら勢力を保っていたと結論付けられました。

会場には、約50名の方が聴講に來られました。図面や写真を数多く示してくださいましたので、皆さん方もそれらを参考にして、興味深そうにお話に聴き入っておられました。

# 津山近郊の農村に生まれたある医師の半生

小島 徹

## はじめに

津山洋学資料館では、平成30年12月から31年2月にかけて、冬季企画展「美作地域の華岡門人」が開催されています。同館においては、以前から華岡流外科を学んだ美作国出身者の追跡調査を続けており、先の展覧会は、その成果をまとめたものです。

最近、郷土博物館の収蔵資料の中にも、そのうちの一人の医師の履歴をたどれるものがあることが判明しましたので、それに基づいてその医師の略歴を紹介します。

## 藤原柳谿の履歴資料

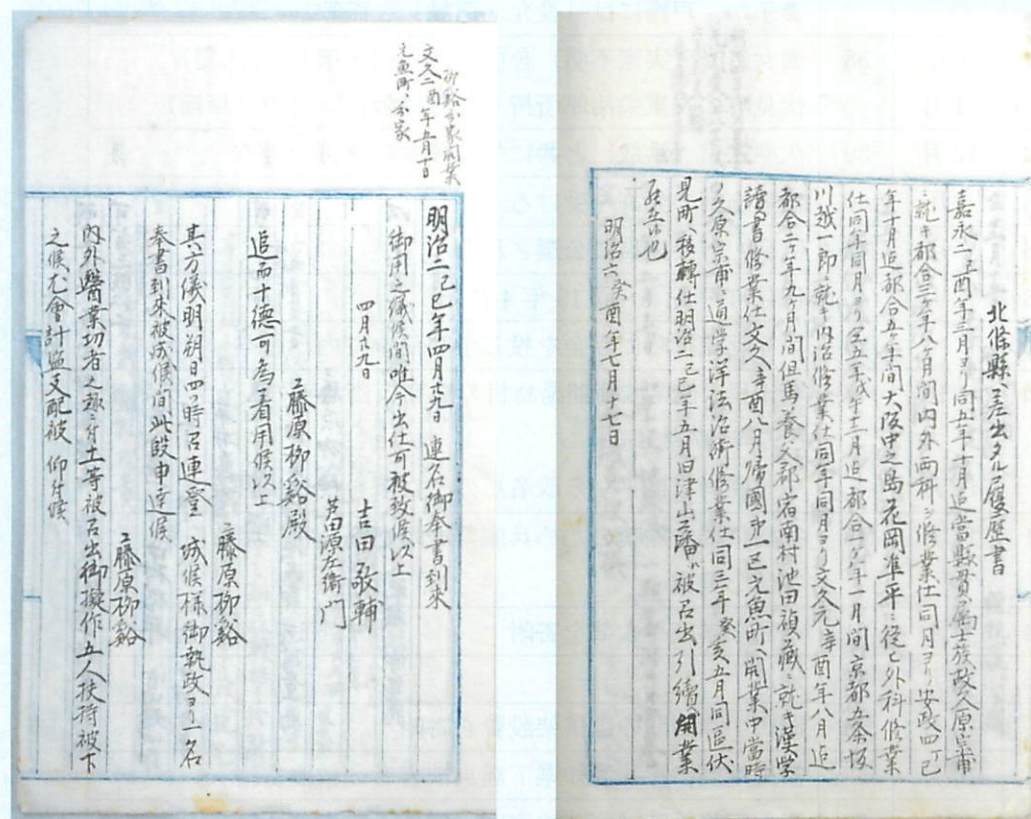
その資料は、土岐家文書70番の「履歴書類」です。罫紙を綴ったもので、最初の2丁には、旧津山藩主松平家の幕末〜明治期の当主3名（慶倫・康倫・康民）の略歴が記されます。その後の5丁には、藤原柳谿という医師の嘉永2年（1849）〜明治26年（1893）の経歴が記されています。これに

基づき作成したのが、次頁の「藤原柳谿 略年譜」です。

この藤原柳谿については、ほかにも次のような資料があります。矢吹家十二支箱文書518番「教諭場講師永田幸平差支之節、講釈助永見殿家来井上大次郎外志人、其外同所助教共、申立候一件」や、玉置家文書353番「明治四年辛未十一月／津山県管轄第四区戸籍／美作国津山伏見町」、津山藩松平家文書D3-1-118「簡略版勤書」明治出身御役人「下」などです。それぞれ、略年譜では「二件書類」「戸籍」「勤書」と略記しました。

先の「履歴書類」では、明治初年の津山藩出仕から廃藩置県までが詳細で、藩から交付された書類の文面が筆写され、それらに「藤原柳谿」の名があるため、彼の「履歴書類」だとわかるのですが、この「柳谿」という名は、もとは号の一つと思われます。幼名や「柳谿」を名乗る前の通称などは記載

がないため、わかりません。なお、華岡家門人録には「柳恵」と記されています。また、明治26年60歳以降の履歴は、他に補える資料がなく、今のところは不明です。



藤原柳谿の履歴書類（土岐家文書70番） 右は明治6年に北条県へ提出した履歴書の控えて、左は津山藩出仕の際に受け取った書類の写し

## 藤原柳谿 略年譜

年	西暦	月日	歳	事柄
天保5	1834	10/22	1	久米南条郡種村の農家藤原周助の四男として誕生（戸籍）
嘉永2	1849	3月	16	故久原宗甫（玄順）に就き内外両科修業
同5	1852	10月	19	大坂中之島花岡準平（華岡青洲の娘婿で大坂の華岡家分塾合水堂を支える）に従い外科修業 （華岡家門人録では同6年10/25入門）
安政4	1857	10月	24	京都五条坂川越一郎に就き内治修業
同5	1858	12月	25	但馬養父郡宿南村池田禎蔵（儒学者で私塾青谿書院を開設）に就き漢学読書修業
文久元	1861	8月	28	帰国し、元魚町へ開業、当時の久原宗甫（洪哉）に通学して洋法治術修業
同2	1862	5/10	29	元魚町へ分家
同3	1863	5月	30	伏見町へ移転
慶応3	1867	正月	34	教諭場講師永田幸平・大年寄らの申し立てにより、教諭場講釈助（当時は山田梅磨家来、一件書類より）
明治2	1869	5月	36	津山藩へ出仕（11等・擬作5人扶持）、引続き開業（この時も山田梅磨家来〈勤書〉）
		9月		10等に昇進・禄百石・士族
同3	1870	12/18	37	津山藩士中村格平の四男敬六を貰受け（同4年4/8届済、養子か、戸籍には「役介 道雄」と記載）
同4	1871	4月	38	養女に光（実家不明）を引受け（同8年6/13入籍）
		11月		伏見町の安東栄治郎所持462番屋敷に同居中（戸籍）
同5	1872	12月	39	久原宗甫（洪哉）と共に牛乳搾取の許可を得る
同6	1873	3月	40	種痘施術の免許を受ける
同9	1876	8月	43	区会・町会議員に公選される
同11	1878	12月	45	伏見町戸長（～同13年4月）
同12	1879		46	コレラ流行時に私金を投じ予防薬を町内へ施与
同13	1880	8/18	47	妻千里（但馬城崎郡湯島村の農家坂西治平の長女）が病死（享年37歳）
		10月		中村高尚（格平から改名）の二女淑を後妻に迎える
同14	1881	11月	48	寒疝に罹り療養のため兵庫県城崎郡湯島村（城崎温泉）に寄留し開業
同17	1884	5月	51	湯島小学校へ太鼓を寄附
同18	1885	10月	52	帰郷
同22	1889	10月	56	岡山・津山間の電信架設費を寄附
同24	1891	10月	58	濃尾地震に際し愛知県下震災被害者へ救恤寄附
同26	1893		60	天然痘流行時に臨時検定医・痘疫予防事務所医員を囑託、津山町の窮民救恤として白米を施与

彼の生い立ち

彼が生まれた久米南条郡種村（今の津山市種）は、津山城下の近郊ではありますが、実は津山藩領ではありません。下総古河藩土井家の飛び地領でした。それでも、津山周辺の農村では、若者が学問や諸芸の習得を目指す時は、領主の違ひに関係なく、まずは津山城下の然るべき人物に弟子入りしたのでしょうか。彼も、16歳で津山藩医の久原玄順に入門して、内科・外科の医術の手ほどきを受けています。

生家は、「戸籍」に「農」としか記されておらず、純粹な農家なのか、それとも耕作などをつつ医業も営んでいた村医師なのか、詳細はわかりません。

津山藩医久原家での修業後、大坂の合水堂で華岡流外科を、京都の川越一郎の下で内科を修得、さらに但馬で青谿書院という私塾を開いていた儒学者池田禎蔵（草庵）から漢学読書を学び、9年間にわたる遊学の後に帰郷して、津山城下で開業しました。なお、「戸籍」

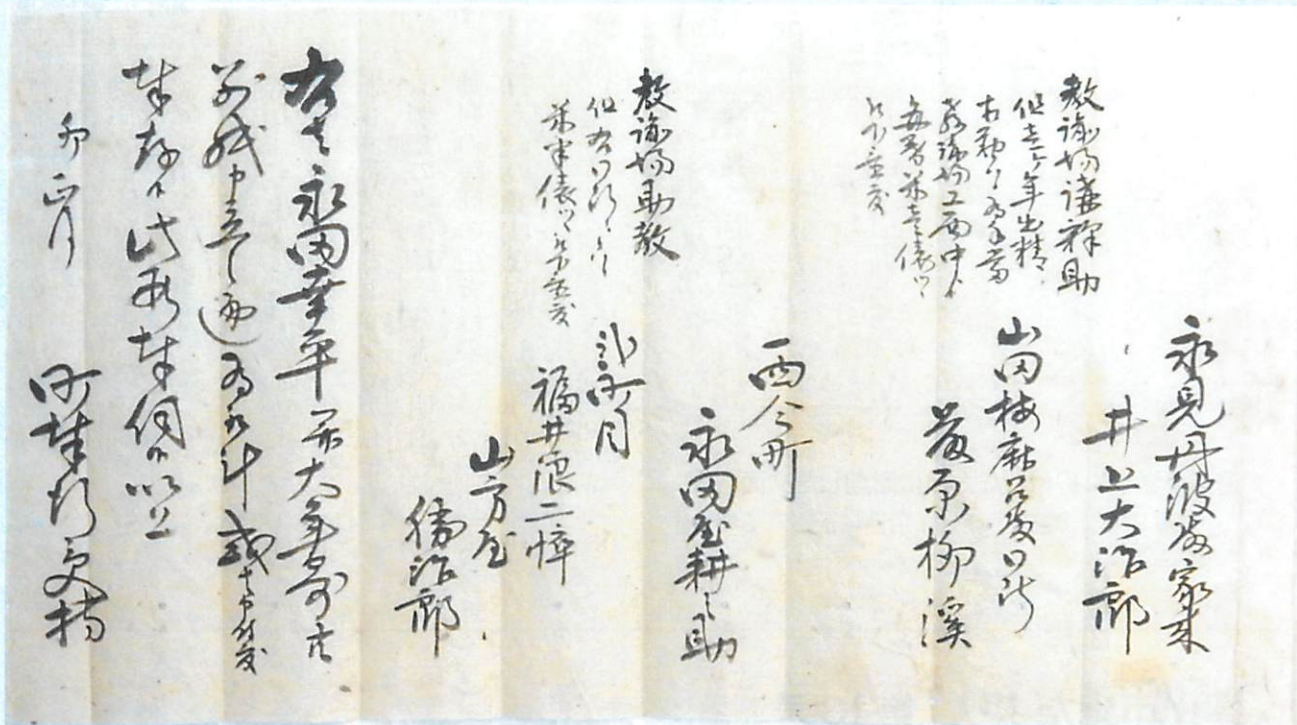
によると、妻の千里は但馬城崎郡湯島村の農家坂西治平の長女とあるので、池田草庵門下での修学中に縁があつて婚姻に至つたものではないでしょうか。

医師としての活躍

開業の当初は元魚町にいましたが、やがて伏見町へ移転しています。帰国後すぐに分家もしており、郷里の種には住まわなかつた様子です。

最初に弟子入りした久原家との縁は、開業後も続いており、久原洪哉の下で洋方医術の修得にも努めています。洪哉の引き合いで、明治2年（1869）には医師として藩に出仕し、後には士族となりました。種痘施術の免許も、津山での種痘事業に尽力していた洪哉に協力する中で取得したものと思われ、洪哉と共に津山に牛乳を普及させようとしていたことも注目に値します。

ちなみに、洪哉の実家は西北条郡井村（今の鏡野町百谷）の医師難波家です。柳谿をはじめとする



「教諭場講師永田幸平差支之節、講釈助永見殿家来井上大次郎外彦人、其外同所助教共、申立候一件」書類のうち町奉行伺書控え（矢吹家十二支箱文書 518 番） 柳谿らを教諭場の講釈助にしてよいか、上司に伺つたもので、柳谿の肩書は家老の山田梅磨の家来となっています。

有能な医師の藩への推薦は、維新期の藩政改革の流れに沿うものではありませんが、自分と似た生い立ちの後輩への親近感も、少なからず影響したものと思われます。

コレラや天然痘の流行時、柳谿は医師として治療に当たるだけでなく、私財を投げ打って予防薬や食糧を施すなど、貧しい人々に寄り添う姿勢を忘れなかったようです。そのような姿勢が評価されたのか、町会議員や伏見町の戸長などの公職にも就いています。

### 彼の私生活

医師の鑑とも言える活躍をした彼ですが、私生活はどうだったのでしょうか。確認できる資料からは、断片的なことしかわかりませんが、10歳年下の妻千里との間には子供が授からなかったらしく、明治初年に養子や養女を迎えているうえ、その妻はもともと病弱だったのか、若くして先立たれてもいます。

その後すぐに、養子道雄の実家中村家から後妻を迎えましたが、その翌年から4年間、湯治のため城崎温泉に滞在しています。「寒疝」という病気に

かかったようですが、妻を亡くした痛みが大きく影響しているものと思われるますし、それまで津山で継続してきた医業を中断しての城崎滞在には、前妻の実家に程近い土地で、糟糠の妻を手厚く供養しながら、自分の半生を見つめ直したいとの意図もあったのではないかと想像できます。

※諸橋轍次著『大漢和辞典』に「寒疝」の語はないのですが、寒さによって起きる発作的な腹痛・腰痛を指すのでしょうか。

### おわりに

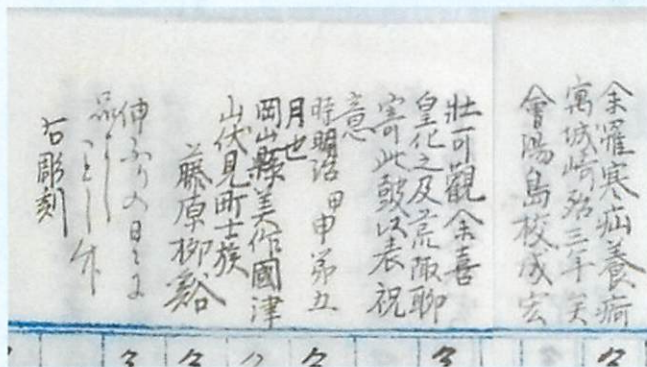
城崎滞在中、彼は湯島小学校に太鼓を寄付しました。「履歴書類」には、その太鼓に彫刻した文面が筆写されています（下の写真参照）。

「余罹寒疝、養痾寓城崎殆三年矣。会湯島校成宏壯可觀、余喜皇化之及荒陬、聊寄此鼓以表祝意。時明治甲申第五月也 岡山県美作国津山伏見町士族 藤原柳谿 伸ふりの日々に品よくことし竹」（句読点は、筆者が追加）

「ことし（今年）竹」とは、今年はいえ出た若竹のことで、夏の季語です。伸び盛りの若竹に、学校で勉学に励む

子供たちや新築の小学校そのものもなぞらえて、子供たちや小学校の行く末を温かく見守る気持ちだが、この俳句に込められています。

立派に完成した小学校を目にして、片田舎にも文明開化の波が打ち寄せていると喜ぶ言葉の奥に、彼の信念や理想も垣間見えるような気がします。藤原柳谿の半生は、幕末〜明治という激動期の医師の生き様の、一つの典型と言えるのではないのでしょうか。



湯島小学校に寄付した太鼓に彫刻した文面  
「履歴書類」最終丁の上部余白に記されています。

## 津山市史だより 第13号

発行：平成30年12月1日

編集：津山市史編さん室 〒708-0022 岡山県津山市山下92 津山郷土博物館内  
TEL：0868-22-5820 FAX：0868-23-9874  
Eメール：tsu-haku@tv.tn.ne.jp